

## グルジア紛争が国際社会に及ぼす影響

インド担当：森尻 純夫研究員

### ＜グルジア紛争がインド亜大陸地域に与える影響＞

インドは、グルジア、オセチア問題と直接に関係する地政的にはいない。しかし、当然ながら、印米、印露関係という意味からはないがしろにできない現実感を持ってこの問題への対応を迫られている、というのが現実である。

#### 1. 民生核開発と印米、印露関係

ウィーンでの核供給国会議が閉幕した。インドは民生核開発の承認と協力を取り付けることに成功した。インドでは「ウィーンでの勝利」と叫んでいる。

最後の難関といわれたウィーン会議は通過したが、実際の核開発プログラムの実施には、以下に記すポリシーとそれを満たさなければならないという条件が横たわっている。それは同時に、印米、印露関係を浮かび上がらせている。

##### A. 印米関係という基軸

アメリカはウィーン会議後、同国下院での承認以前に、インドに対して国務長官ライス自ら事業の進捗、技術供与を要請して来た。インドのメディアでは、現下の米経済環境を打開するひとつとしてインド核ビジネスがあるのだとっている。

##### B. 中国とその背後に立つ核供給国オーストラリアとのあらたな関係構築

ウィーン会議がインドに対して好意的に終始したのに対し、会議後、中国はオーストラリアとともに、いわば「レッド・カード」を発した。

9月9日、数度の接触を積み上げ、合意に達した。最大のポイントは、NPT 不加盟であるパキスタンの民生核開発の推進にインドは協力するというものだ。すでに中国はパキスタンで核事業開発に着手している。背後にはウラン供給国オーストラリアが控えている。

##### C. 印露関係の温存

ロシアは、9月6日、インド・アラビア海、ベンガル湾の両岸にモバイル型の原発計画を表明した。ロシアの原発参画をインドは歓迎している。エネルギー問題の重要な一角としてインドはロシアを重視している。

基軸として親米路線を歩まざるを得ないインドは、印露関係とのバランス・オブ・シートを構築する必要がある。グルジア問題に沈黙を守る背景が、ここにある。

## 2.アフガン、パキスタン情勢と印米、印露

a) 9月9日、アメリカはイラクの駐留戦略をアフガンに振り替えると発表した。8000人規模である。すでに9月はじめからアメリカはアフガン、パキスタン国境を破っている。はじめて地上戦を認めている。すでに、戦争状態といえる。

b) 8月18日のムシャラフ辞任には、納得できないものがあり、突然の表明は「謎」めいている。中国との核を含めた、あらたな経済関係緊密化を目指していたムシャラフが、ロシアの動向を背景にアメリカから激しい圧力を加えられていた、という見方がある。

c) グルジア問題を契機に新冷戦時代に本格的に突入することになると、アフガン、パキスタンは東のボーダーになる。テロ戦争の名の下におこなわれてきた NATO、アメリカの軍略は、まったくあらたな姿、形を問われるだろう。

パキスタン、ザルダリ新大統領は、カシミール問題で斬新な提案がある、とインドに呼びかけている。アメリカとザルダリ人民党(PPP)にはなんらかの合意が隠されているようだ。

アメリカの新政権の方向性をも左右する課題が、ここにはある。